

若年層のソーシャルメディア利用における不寛容の実態の研究

宮崎 真有

近年、社会において多様性が求められる一方、SNS での炎上など他者への不寛容性は際立つ。田中・山口(2016)の研究をはじめとして、不寛容な実態はソーシャルメディア上の一部のユーザーによるもので、多くのユーザーは沈黙していると考えられてきた。ただ、不寛容な投稿は一部でも、多くのユーザーの評価・拡散がなければ炎上等はしない。そのため、ソーシャルメディア全体に他者の言動への不寛容な実態があるのではないかと推察する。

そこで、不寛容な投稿への評価・拡散行為に着目し、不寛容な実態に多くのユーザーが関わるのか否かを明らかにするため、以下の仮説を中心に調査、考察を行った。仮説1 不寛容な投稿の評価・拡散数が多いほど、閲覧したユーザーは不寛容な投稿に賛同するユーザーが多いと認識する。仮説2 不寛容な投稿の評価を気にするユーザーほど不寛容である。

本研究は質問紙調査を行った。調査対象者は、日本人を中心とした20代のソーシャルメディア利用者で、561名とした。主な調査項目は、ソーシャルメディアの利用実態、閲覧する情報の認識、異なる他者への不寛容性、実際の投稿への反応の4項目である。

仮説1 に関して、ある投稿への①自身の評価の意味と②他者による評価の意味の認識とのクロス集計から、どの意味で評価を行うかに関わらず、他者の評価を投稿への賛同と認識していた。また、評価・拡散を賛同・共感の意味と認識するかの項目では、認識しない割合は18.4%に対し、認識する割合が44.0%だった。以上から仮説1は支持された。仮説2 に関して、評価を気にするかの項目と不寛容の項目に有意な正の相関が見られ、重回帰分析により、前者の項目が、後者の項目に有意な正の影響を及ぼす結果となった。また、ロジスティック回帰分析により、評価を気にするかの項目のうち、評価・拡散を重視する因子が実際の投稿への反応する確率を有意に高める結果となった。以上から仮説2は支持された。一方で、自由記述欄での投稿への反応の内容分析を行うと、評価は必ずしも賛同の意味でなかった。また反応しない者の中に、関わりたくないなど不寛容な投稿に距離を置く層が見られた。

仮説1、2の立証により、不寛容な投稿を閲覧したユーザーは評価・拡散数を投稿への賛同と認識し、投稿の評価を気にするほど投稿に流され、不寛容な実態に参加する。そのため、評価・拡散するユーザーも不寛容な実態に関わると考える。一方で、内容分析より不寛容な投稿に多くは反応せず、必ずしも不寛容な投稿に賛同して評価するわけではない。しかし、不寛容な投稿を否定的に捉える層は反応しない、または反応しても賛同と認識されるため、否定的な存在は認識されにくい。そのため、不寛容な投稿への賛同が際立ち、不寛容であるように見える。ただ、実態の検討においては、実際に不寛容であるかより、閲覧するユーザーがどのように認識するかが重要である。つまり、ソーシャルメディアにおいて不寛容な実態は形成されており、一部の不寛容な投稿をする層だけでなく、多くのユーザーが不寛容な実態形成に関わっていると考えられる。(指導教員 後藤 嘉宏)